

第1特集 高収益に潜むレアルの落とし穴

第2特集 人間は非合理か 行動経済学入門

週刊

エコノミスト

3/22
2011

ブラジル投信残高7兆円超

レアルの 落とし穴

「通貨選択型」偏重と増税の行方 インフレ圧力と高金利通貨の“薄氷”

始まった資金流入の変化とは
数字で見るブラジル関連投信

社会を良くする

行動経済学入門

中国人による痛烈中国批判
フェイスブック革命の凄さ

新連載小説 第10回

鉄のあけぼの 黒木 亮

エコノミスト
レポート

流行る先祖探しビジネス

毎日新聞社
定価600円

大正12年3月30日創刊(旧刊名) 発行所 毎日新聞社 東京都千代田区千代田1-1-1 電話 03-5561-1111 郵政番号 4103 郵便局 日本郵便 13月21日号

エコノミスト
レポート

Economist Report

家系図調査

動き出した先祖探しビジネス
「究極の自分史」は上質なミステリー

歴史ブームを背景に、自分の先祖に関心を持つ人が増えている。家系図作りには、個人のロマンとビジネスの世界が広がっている。

先

祖探しをする人が増えている。なかには数百年さかのぼって自分のルーツをたどる人も珍しくない。それを狙ったビジネスも登場している。

「先祖探しは手順を間違えなければ200年前からさらに1000年前まで突き止めることができる」。こう断言するのは埼玉県所沢市で行政書士を営む丸山学氏だ。行政書士業務のかたわら、3年前から先祖探しを仕事として請け負っている。200年前というと江戸時代後期。そして1000年前というとなんと平安時代。歴史の教科書でしか知ることのできない昔の先祖を、どうやって探すのか。また、依頼する人は何を追いつ求めているのだろうか。

前までさかのぼって調べてほしい」と頼みにきた。丸山氏はまず、古文書を調べ苗字から場所を特定して、依頼者の遠い親戚の家を探し当てた。その家には明治時代の先祖の小学校の卒業証書があり、そこに「〇〇県平民」という文字を見つけた。さらにその家に保存されていた古い文書などから先祖が江戸時代の豪農であることが判明した。

また、長野県の60歳代の依頼人の場合は、戸籍や古文書から先祖が新潟県の温泉地に住んでいたことが分かった。さらに現地の郷土史を読みとると、元禄時代に高田藩（新潟県上越市）の城下町から移住してきたことが分かり、7〜8代前の先祖の動向が判明した。

一般に、明治以降は戸籍が残っているのだから、さかのぼることは比較的容易だ。明治5年に戸籍制度が作ら

れて以来、5回の改正があったが、現在は申請者が直系卑属（子、孫、曾孫など直系の血族）であれば一番古い「明治19年式戸籍」までさかのぼって取得することが可能だ。先祖が転籍などで戸籍が遠隔地に移動している場合は手間がかかるが、4〜5代前までならそれほど難しくはない。

戸籍法以前の手がかりは、現地調査で発見した「過去帳」「宗門人別改帳」「分限帳」といった江戸時代の古文書が頼りになる。「過去帳」は故人の戒名や俗名、死亡年月日などが書かれていた帳簿で、代々の墓がある寺に保存されていけば、先祖代々の記録がわかる。「宗門人別改帳」は元来、キリシタンでないことの証明として先祖がどこの寺の檀家であるかが村ごとに記載された江戸時代の戸籍に相当する。「分限帳」は各藩の藩

かすがい
春日井 しょうじ
章司
(ジャーナリスト)



江戸時代の宗門人別改帳

る。膨大な量の古文書を前に頼れるのは多くの調査から得たノウハウと勘のみ。もはや行政書士の枠を超えた活動だ。そして運がよければ平安時代までタイムスリップできるというわけだ。

丸山氏は自身の経験をもとに2年前に出版した「家系図を作った先祖を1000年たどる技術」でそのノウハウを解説している。自ら先祖を調査し、900年前の鎌倉時代まで特定して長さ3・5頁におよぶ家系図を完成させている。

事務所の仕事では、「2000年たどるコース」(36万7500円)、「400年たどるコース」(105万円)、「1000年たどるコース」(210万円)を設定しており、標準的な2000年コースなら、調査期間半年、1年で先祖を9割方調べることが可能だという。

これまで家系図といえば庶民には縁遠いもので、皇室や江戸時代の大家

名家など由緒ある名家の証しだった。ところが近頃は歴史ブームの影響もあって認識が変わりつつある。インターネットで「家計図」を検索すると、膨大な数の家計図サイトがヒットしその数に驚く。いくつかを覗いてみると多くは行政書士が運営する家計図作成会社のホームページで、費用は3万円台から数十万円まで、100万円を超す豪華な掛け軸や巻物の家系図なども載っていたりする。

「先祖探しを行政書士が請け負うのは、家系図が行政書士法に基づく事実証明に関する書類」に当たると考えられてきたからだ。また、戸籍取得にはプライバシーがからむので、本人以外の場合には、行政書士などが職務で交付請求するのが一般的だ。ところが、昨年末に最高裁で興味深い判決があった。行政書士の資格がないのに家系図を作成して報酬を得たとして、行政書士法違反で起訴された北海道の業者が、家系図は

古文書と格闘しながら先祖をたどる丸山孝氏

事実証明書類に当たらないとして逆転無罪となり、観賞用の家系図作成には行政書士の資格は不要という判断が下ったのだ。つまりこれまで家系図作成ビジネスは、行政書士の事実上の独占業務だったが、行政書士の資格がなくても可能になった。この「規制緩和」

をきっかけに家系図ビジネスが勢いづくことは想像できる。

丸山氏はこれまでに1000件近い調査を行い、現在も30件以上の依頼を受け日々東奔西走する。そこまでに力を入れるのは、高齢化社会の到来で、新たなビジネスの可能性が広がっているからだ。先祖探しを行う人は、人生の終着についても真剣に考える人が多く、例えば行政書士の分野では、遺言書作成、尊厳死の宣言書、財産管理、死後の事務処理なども含めて、依頼人になる可能性がある。

もつとも行政書士が家系図作成ビジネスを手がけることについては、身元調査につながり、人権侵害の恐れがあるとして、反対する人々もいる。

パソコンで家系図作り

一方、1000年さかのぼる先祖探しまではしないが、NHK大河ドラマ「龍馬伝」などの歴史ブームを背景に、家系図を持ち歩いて先祖ゆかりの地などを尋ね歩く「カケイザ」¹といわれる人々も出現している。そのため家系図作りをすすめるガイドブックなども見かけるようになった。

自分で家系図を作りたい、という要望に応えるのがパソコン用の家系

図作成ソフトだ。すでに何種類もが発売されている。そのうちのひとつ、「ルーツ2006」を制作した横浜クリエーション(横浜市)の岩本卓也取締役は、まったく個人的な必要に迫られたのがきっかけだった。

「7年前に父親が突然亡くなって、父方も母方も兄弟が多く、長男として家系のつながりを整理する必要があった。戸籍謄本を自分で集めて表計算ソフト「エクセル」で作ったが不便で使えなかった」。

「ルーツ2006」は更新可能なデータベースで、必要な情報を入力すると家系図が自動的に作成される。先祖や親兄弟の名前や誕生日、趣味、顔写真などとともに相続人と相続の割合も表示し、養子縁組など複雑な家系図も作ることができる。ユーザーは40〜50歳代が中心で80%以上が個人。家系図作りのおもしろさが伝わって最近では団塊世代から30歳代の主婦にまで及ぶという。

ユーザーのひとり、北海道の40歳の男性は「母親が亡くなるまで家系図とは無縁だったが、調べているうちに興味がわき、ついには自分の知らない先祖の出身地まで訪ねた」と家系図の不思議な魅力を語る。この男性は幸いにも明治初期まで妻の両親合わせて4系統すべての戸籍が取得、集まったデータはなんと約600人。子どもにも貴重な財産が残せ

家系図



たと満足している。岩本氏によると、こうしたソフトの利用者は檀家離れがすすむ寺社や冠婚葬祭を扱う企業にも広がっているという。

海外ではすでに定着

インターネットを活用して、自分のルーツを探るのは、欧米ではもはや一般的だ。米国、英国、ドイツ、イスラエルなどでは、いくつもの巨大な家系図サイトが存在し大盛況だ。

世界最大の家系図サイトはイスラエルの「マイ・ヘリテージ」で3億7500万人の系図登録者（利用者数ではなく家系図のツリーに加えられた人の数）と、約780万家族のデータが登録されている。

また、移民国家である米国では自分のルーツへの関心が高く、ネットの検索カテゴリーでも家系図関連語は常に上位にあり、2007年にスタートした「ジエニ」（米カリフォルニア州）は、設立後わずか5カ月で

500万件の系図登録者が集まった。

ビジネスとしても確立されており、ユタ州に本拠を置くネットワークサービス会社「ザ・ジエネレーションズ・ネットワーク」が運営する家系図サイト「アン

セストリー・ドットコム」は老舗的な存在で、サービス料を支払えば系図登録者を検索でき自分の先祖や遠い親戚を探ることができる。また詳しく知りたい会員のために英米の主要新聞の紙面データや過去に出版された書籍資料のデータ、軍隊や移民記録なども検索できるようになっている。

「アンセストリー・ドットコム」のサービスは、最先端のDNA鑑定にまで広がっている。サービスを申し込むと口内粘膜採取用の綿棒が送ら

れてきて、その鑑定結果から自分の父系、母系の属性や自分に近いDNAを持つ人が全米のどの地域に多いのかが地図でわかる。さらに、依頼人に近いDNAを持つ人がサイト利用者にいる場合はコンタクトをとることも可能だという。

日本でもネット利用が増加

日本でも、家系図のネット化は始まっている。07年にスタートした「ネットde家系図」はネット上で手軽に家系図を作ることができるサイト。メールアドレスを登録すれば家系図印刷以外のほとんどの機能が無料で活用できる。

使い方はシンプルで、最初に自分の名前や生年月日、出身地、職業などのプロフィールを入力。その後、配偶者、親、子どものデータを入力していくと、たちどころに家系図が表示される。家紋や花押、顔写真などの絵柄も表示できる。簡単な操作で登録者を増やしていけるのが特徴だ。

ネットにつながっているため、他の会員の利用状況が閲覧できるのも特徴だ。たとえば自分と同じ苗字の人が何人いるか、出身都道府県別の人数分布や系図入力者数のランキングなどが分かるような仕組みになっている。将来は、ネットを介して、

自分のルーツが新たに分かったり、他人とつながったりできる可能性がある。

利用者の半数以上は30〜40歳代の男性だ。ただし、熱心な利用者は50〜60歳代に多く、系図に100人以上の登録者を書き込んでいるのはこの世代。女性利用者は家系図というより親戚の名前や誕生日を書き込む備忘録的な使い方をしているという。

同サイトの登録者数は07年当初の6700人から10年末には2万2000人（家系図に登録された系図登録者数は22万5000人）を超えた。海外サイトにはおよばないが、順調に増え続けており、近々サイトのリニューアルも予定している。同サイトのシニアアドバイザー八木大造氏は「電子化が進むことにより家系図は身近になり、静かではあるが、生活のなかに定着しつつある」と語る。

古い戸籍謄本から明治初期の先祖がわかるだけでも家系図を作る醍醐味はあるが、江戸時代以前にまでさかのぼることができると聞くと歴史ロマンの領域だ。先祖調査は家系図を作るためだけではない。たとえ目標にたどりつかなくても、先祖の生きた時代のリアルな営みが分かる（丸山氏）。それは、上質なミステリーを読むような知的興奮を与えてくれるという。

海外サイトではDNA調査も実施

